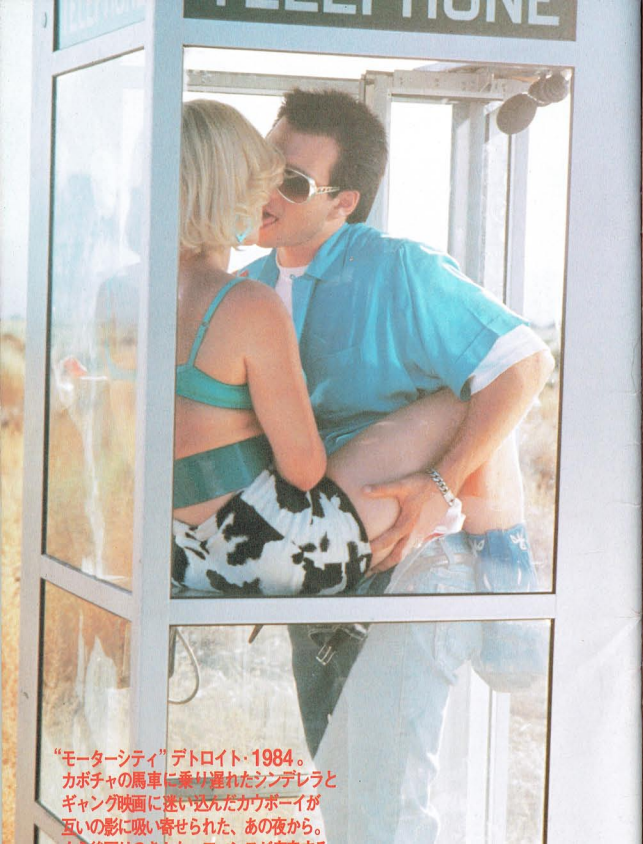
TRUE ROMANCE

CHRISTIAN SLATER

PATRICIA ARQUETTE



“モーターシティ”デトロイト・1984。
カボチャの馬車に乗り遅れたシンデレラと
ギャング映画に迷い込んだカウボーイが
互いの影に吸い寄せられた、あの夜から。

Summary

Patricia ARQUETTE
Christian SLATER

TRUE ROMANCE

トゥルー・ロマンス

2 解説
4 クリスチャン・スレーターのスーパークールな魅力／金子裕子
5 豹柄の似合うブットビ嬢、パトリシア／秋本鉄次
6 オールスター・キャストが素敵に描き分けられた「トゥルー・ロマンス」／渡辺祥子
7 「トゥルー・ロマンティスト」の映画世界／稲田隆紀
9 プロフェッショナルに徹したトニー・スコット監督／笹見有弘
天下無敵のタランティーノ脚本／滝本誠
10 白の誘惑・笑うことと、死ぬこと／榎津佳行
11 愛はすべて一目惚れ…／正津勉
14 ストリートに現れたリトル・マーメイド／石川三千花
16 トラブル・メーカー、デニス・ホッパー／石飛勝己
ビザールな悪役路線のウォーケン／川口敦子
18 スタッフ・キャスト・プロフィール
20 ブラッド・ピットのイケナイ魅力／粉雪まみれ
英国の匂いのするゲイリー・オールドマン／佐藤友紀
21 兄貴に負けるな、クリストファー・ペン／江戸木純
22 物語
24 クレジット

1993年アメリカ映画／上映時間2時間1分／7巻3298m シネマスコープ・サイズ（2.35フレーム）ドルビー・ステレオ、THXサウンド／字幕翻訳：戸田奈津子
配給：松竹富士（株）

About the film

〈解説〉

エルビス・プレスリーとカンフー映画が大好きな若者クランレンス。彼は誕生日の夜、場末の映画館でソニー某の映画を見ているときに知り合ったクラハマと意気投合し、実は彼女（クランレンスの店のボスかつバーステープ・レゼゼントにハマってしまったこと）が、ボーイフレンドのことを愚痴ってしまったことから、ボーイフレンドとの間に生まれた子供を引き取ることになってしまう。

クランレンスとクラハマの最悪の出会いは、ハードで危険な状況を次々に生み出すが、2人が貴いのは愛…

これこそ真実の愛！トゥルー・ロマンス。

幼少時から知られるCNNテレビの評論家&史上最高の俳優賞

Cast

クリスチャン・スレーター

無軌道・軽薄・無責任だけどキッチン芯が通るスーパークールな魅力

CHRISTIAN SLATER

He couldn't give a fuck about anything except Rocking and Rolling, living fast, dying young,and leaving a good looking corpse

「トニー・スコット監督でもトップガンになる必要はないだって。主演は超スーパークールな女たらしだぜ、奴なら俺の本拠地が安泰さ」

脚本担当のタランティーノの弁護とレイモンド・ボーイ監督作品の脚本書き上げた本人のクールな一言で、結局、主人公クラッシュ役のオファーが来た。

1969年、英NT生まれ。父は舞台俳優、母はキャスティングディレクター。生後3か月の息子を舞台で抱き上げてここがあなたの人生よ！と母が言ったというエピソードがあるほどに、ちいさい頃から舞台に慣れていたのがきっかけで強姦や殺人人魂遊行なども、クリスにピッタリだ。

1979年、9歳で舞台俳優デビュー。来日の際のインタビューで、姉のロザンナ、たもんねもちろん、姉とは前から、ツルつけていたから使ってみかって？冗談でモテるにあと、父親はほとんど姉妹ばっかりで、姉の名前は、ルーシー、姉妹ばっかりで、ルーシアはもっとイイ女。ルーシアはもっとイイ女。ルーシアはもっとイイ女。

オールスター・キャストが素敵に描き分けられた「トゥルー・ロマンス」

渡辺祥子

おやまあ、あの不良もやじが息子に説教だ。

れているあなたの姿はいかにも思い出深いものがあるでしょうね。

がし、息子がクリスチャン・スレーターで父親がデニス・ホッパーという、絶妙の顔合わせ。デニス・ホッパーといえば、ジェイムズ・ディーンとの共演作『理由なき反抗』でのクエンティン・タランティーノの自伝的要素が濃いというストーリーの主役。ウォーリー・はクエンティンの分身であるクラレンス・ウォーリーはクエンティンの兄のようなものだったんだ、と、自分の分身を持ち、いっぱいは望郷を実現して守護になっている。そんなクエンティンの分身たちが、ジェイムズ・ディーンとの共演作『理由なき反抗』でのジム・ストーク、ジェイムズ・ディーンとの共演作『ジャイアンツ』でのジェット・リンクスやお酒に溺れることもあるし、お金のために淫猥画にいやいや出ることもあるし、お金のために淫猥画にいやいや出ることもあるし、お金のために淫猥画にいやいや出

Director

TONY SCOTT

トニー・スコット〔監督〕
プロフェッショナルに徹して観客を楽しませる、〈華麗なるイギリス組〉のヒットメーカー

「トップガン」(86)、「ビバリーヒルズ・コップII」(87)といった一つのスーパーヒット作を手がけていたトニー・スコットは、華麗なる演出家として、時代の寵児と監督者には、他にトップ・ガンの公開日に、ケヴィン・コスナーとアンジェリカ・ハストンが主演した「ボディガード」(92)、ジェリー・ブラッカイマーとの共作で、ブルース・ウィリスとデミ・ムーアが主演した「ヒルバー」(91)、ディ・ハーディが主演した「ハンガー」(83)、現代の「ニューヨーク・ヴァンパイア」(85)、「ハンガー」の原作者ローリー・ヒューズ原作の「ヒューマン・ウェブ」(96)、「ヒューマン・ウェブ」(96)、「ヒューマン・ウェブ」(96)、

愛はすべて一目惚れ

正津 勉（詩人）

トゥルー・ロマンス。だからそれはこの観客だけ みるとちょっとロマンスじゃないなんてそんな映画にもなるだろなんて。でも、真実の愛とというのだ。いかにも大時代ハリウッド的ではないかうだが、ストーリーは違う。ヤボになりようがない。スタイルはアートであるわけがない。シャレていると言ってもいいプロディティーとされているのである。トゥルー・ロマンスは、おシャレ映画。おシャレに愛を担ぎ出している映画なのである。それでもこの世で教える真実の愛とはなにか。愛はすべて一目惚れ。

〈ラブ・アット・ファースト・クリンプス〉

そう、神のごとき、まずはもっと簡明、若い二人が出会うあのいかにも最初のシーンからこのプレゼンテイションは異なっている。まずは見てみよ。

つめたい映画がビルの谷間をふきつける。ホームレスのジャンキーがたたらをふくコーストタウン。もっと色恋に似つわしくて、街ロイート。

男はダウンタウンのコミックブックショップで働く若者、クラレンス・ウォーリー（クリスチャン・スレーター）。カンフー、映画好きでエルビス・プレスリー教のちょっとブッ飛んだオタクである。これが主人公。

のパターさんにもふれ、ひとり場末の映画館でカンフー映画の三本立てを観いっている。と隣の席にドハデなスタイルのブロンド娘が座りこの娘がクラレンスにもたれかかってくる。

話しかけてくるこのオンナ、パイの中の絶妙な隠みかのせ。

さて、映画がハネて二人はパイを食べに行くなんだかんだおしゃべりをする。そこでそれからどうするかが、そう、出会ってすぐ、メイクラブをする。

どうしてって？　いきなり一目惚れだからだ。そういうこと。エルビスの二匹宮ならこうだ。

〈アイ・ニード・ユア・ラブ・トゥナイト〉

今夜はお前の愛が必要だ――

それにしてもなぜこういう夜の甘美さといったら。

〈ラブ・ロード・キング・アット・ナイト〉――今夜はまんま最高――

しかるにそんな夢のような夜があっていいものかいまいましいクラバートはまじめくり口をひらくのだ。厳重の厳禁のことを毛布をいまいきの二人が愛を語りあうこのシーンは素敵だ）

アラバマはいろんなんいいことにじつは、あんたはあんたの店のオンボロ車の鍵まじ、生日のプレゼントなのにエルビスのCDがなんと可愛ゆもしてそ、ここ、ここ、ここ

ストリートに現れたリトル・マーメイド

いやー、やっぱり血の気の多い映画は熱くなりますね。興奮しますね。映画館を出ると気分はランボー者。なんだか、やみくもに大股早足でガンガン歩きたくなる。

こういう気分になるのは、「レザボア・ドッグス」以来のことだ。なにしろタランティーノが放射するエネルギーは、すさまじい。バイオレンスは「暴力のための暴力」として昇華され、恐怖心すらふっ飛んでしまう。ロマンスは、絵に描いたバラの花のようにバカバカしいほどロマンティックだ。非常に映画的で、それだからこそ私たちの心の奥に潜んでいる「突っ走ってみたい欲望」を刺激する。タランティーノ熱に一度かかってしまったら、もう抜け出せない。うなされたまま、次回作を心待ちするようになるのだ。

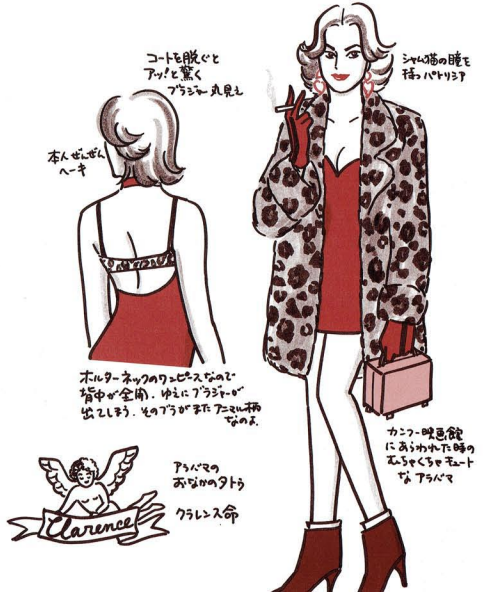
それにしても、本作品のキャスティングはぜいたくだ。役者心をそそる脚本に、出演者の誰もが夢中だ。デニス・ホッパーやクリストファー・ウォーケンを筆頭に、各人の見せ場がタップリ用意されている。そんな中で、主演のクリスチャン・スレーターとパトリシア・アークエットの力量には感心する。ひとくせもんの実力派を前にして、かすむどころか、最初から最後まで作品の核となっているのだから凄い。

C・スレーターの狂気の演技はすでに定評があるが、パトリシア・アークエットの新鮮な魅力は大発見だった。こんなに活きのいい若手女優を見るのは、久しぶりのような気がする。水の中をスイスイ泳ぎ回っていたリトル・マーメイドが、突然、暗黒のストリートに現れてハイヒールのかかとを鳴らしているみたいだ。メリハリのきいた体に、アニマル・プリントの洋服がよく似合う。これ見よがしなブラジャーも、ぜんぜんいやらしさがない。普通こういうファッションだと、ハスッパ感ありのヘビメタ姉ちゃんになるのだが、彼女が着ると最高にかわいい。着る人によって、こうも洋服が違って見えるものかと、私も驚いた。

パトリシアがこの作品のヒロインに見事にはまっているのは、そのファッション感覚と同じように、エキセントリックだが純真さを感じさせるからだ。やくざものに枝珠さひとつで立ち向かう強さと、愛する男に100%尽くすやさしさが同居している。それに、彼女のキスはピーチの味がするのだ。

明るさの中に時折見せる、湿りけを帯びたパトリシアの表情がいい。今、可能性が期待できる注目度ナンバーワンの女優だと思う。

石川三千花（イラストライター）



Cast

デニス・ホッパー
アクター、ディレクター、トラブルメイカー

DENNIS HOPPER

You walk like a Goddamn Bulldozer...
Don't get me wrong I'm happy to see you... just slow it down...

デニス・ホッパーにはいくつかの顔があるまず、ジミー・ディーン&リリー・ストラスバーグ直伝のメソッド・アクティングを体得した役者として「ブルーベルベット」'86、「ハリス・トラウド」'91などが代表作か。

監督作には全部書けようってイージーライダー」'69、「ラスト・ムービー」'71、「ケイオス・ザ・ロード・オブ・ザ・ガン」'81、「ウィンド・ハット」'86、「ハリス・トラウド」'91などが代表作か。

監督作には全部書けようってイージーライダー」'69、「ラスト・ムービー」'71、「ケイオス・ザ・ロード・オブ・ザ・ガン」'81、「ウィンド・ハット」'86、「ハリス・トラウド」'91などが代表作か。

写真集、One on Shots にはウォーホル、ホッパー、ニー、キング牧師ら60年代のイコンが続々登場する。ポップアートの収集家としても知られている。がなんといってもこの一番ズバリになるのは、「アンディ中年」としてのホッパーだ。

「ブルーベルベット」で注目を浴びたとき、「私生活もっていこのあいだまで映画で演じた役とほとんど同じドラッグの中毒だった」と語られた人気復活の秋、ドーム地球の黙示録「9時のダイヤング、ハート」地獄のゲーム、ネス'91年の目の当たりにできる。ジェームスディーン的弟分俳優として将来を嘱望されながら、監督に大ケンカして撮影所をクビになった人、監督インターフライ、ニューシネマ、ヤッピー的俳優となりながらリリー・ストラスバーグ直伝の「ラストムービー」を引っ提げて、ホッパーだったところが、86年以後、酒も煙草も断って健康後具、中年となり、役者、監督として順調にキャリアを積み、2度来日して「優しい中年イメージを日本のファンに植え付けてしまった。93年には「パリ、テキサス」「スーパーマリオ」と出演作が続々公開された。

けれども大丈夫、日本に伝わってこないだけで、ホッパーのトラブルメイカーぶりは健在なのである。ビル出演、監督はいいのが、主演のドン・ジョンソンが出演、監督はいいのが、主演の中で怒りをぶちまけるシーンはハートに火を付けて、が編集後にもめたことまでは知られているが、決断してもめたことまでは知られていない。なんて言ってイーライ・ウォーターホッパーの強引さやり方にイライラしてしまい、次回作でホッパーに絶対やめたほうがいいわと告げ口したという逸話もある。4人目の妻とも一男をもう計なからさっさと離婚トムペレンジャー主演の監督作はいっまでたっても撮影がカットされないなにホッパーブルの子監督する。

文＝石垣陽巳

クリストファー・ウォーケン
タフさを病的な演技で包む ビザールな悪役路線をしたたかに究めていく

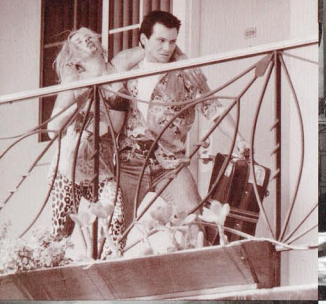
CHRISTOPHER WALKEN

I have not killed anybody... since 1984

午さがりのカフェで恋敵の男例をうけとめたなまめかしくも微かに微かな笑みを漂りつかせ、そうして瞬はいつものようにだこまでも醒め逃っているのだった悪ないたこいうまはいりっそ、見えすぎる自らの不幸な宿命さえも見すかして悲しみより先に降り積もる虚無感を演じて若さもっている顔、グリニッジビレッジの冬がの詩ひんやりとした感の感触で目を奪い、異場の冬天を見つめ、未来を見る力を持っていまった「アッドソーンの青年と美しい受難者の系譜が尊き思われていったが、91年、来日したなどよりは「ジョ」ビズ・キッドとして成長ある中で当たり前に身にいたたかフ女芸人根性を感じさせたそんなナショナルドゥ・ウォーケン（本名）は45年3月31日、NY州ロングアイランドに生まれたドイツ出身の父はベリーを経営、コットランド系の母は流行にのっとって自ラにタップを習の流行にのっとって自ラにタップを習子は巨ムカサンス演出のブロードウェイ映画に出演し、ジャズ、ブルーズ、ロックの要素を盛り込んだ新感覚の「ベニーフロムヘヴン」'81にそれはるとんど演歌にいう歌を歌うようなダンスの楽快なステップ、それは自分足らずストー出演で映画をさらった「ミストー」'91の死のダンスへと引き継がれて「ラウ0ウィン美しく残物たち」'83「パラドマンリターンズ」'92へとなる前的な演技で急ビゼールな歌詩作りつつもあ恐ろくて現時点で本ったこの路線をとったかに究めていこうにはあのオニ・ホッパーの系譜見り場が意されているという。輝本ラ・ティーノの監督作、レオ・ボードスの可潤ぎシーンにも勝る軽やかなテップが飛び出したりするとこちらが見難なのだが？というわけでウォーの「ストゥルー・ロマンス」開映が待ちい！

文＝田口俊樹

Staff Cast



ソウル・ルビネック

ブロンソン・ピンコット

バル・キルマー

サミュエル・L・ジャクソン　マイケル・ラパポート

「トップガン」の好演以来のトニー・スコット作品への登場。

ジュリアード卒業後、十代でシェイクスピア劇の舞台に立つ。百作の戯曲で、ニューヨークの舞台にデビュー。『天才ウディ・アカデミー』「トップ・シークレット」の後、「ウィローで知り合った」ジョアンヌと結婚、「もう一度殺して」で夫婦共演を果たした。サム・シェパードとの共演、「サンダーハート」の後、「ブロンディー／女銀行強盗」に出演。

プロデューサーに相ひざを突かせまくり、麻薬密賣の仲介をする役者エリオットを好演しているブロンソン・ピンコット。スコット作品ビバリーヒルズ・コップ2」でも熱演を見せている他、至業白書」「アウター・アワーズ」に出演している。役者を夢見てオーディションを行い自身を送るクラレンスの友人役デックを演じるマイケル・ラパポートは、「アサシン」「ボイエ」で出演。スピーブ・ロ要するとせい役として、味のある演技を見せるソウル・ルビネックは、「呼ばれる者」「お兄」で、そのまま等、数多くの映画に出演している。ゲイリー・オールドマンに撃ち殺されるアジャクソンは本作では脇役に徹しているが、一連のスパイク・リー作品の他、ジュラシックパーク」「ローデッド・ジョンソン」でシフラック・アクターとしては、今や超売れっ子である。

製作／サミュエル・ハディダ

1953年カサブランカ生まれ。パリでマーケティングを学び、1978年メトロポリタン・フィルム・エキスパートを設立。フランス国内等で100本以上の映画をヒットさせた。1982年デルタビデオを設立、MGM、カロルコ、ベストロンを傘下。フランス最大の販売会社になった。傘下のディヴィス・フィルムはフランス映画の全国網に成功。アメリカ映画も積極的に扱うように。Cri "Torque" (Only the Strong)」を掛けている。

製作／スティーブ・ベリー

南カリフォルニア出身。「ロッキー」「普通の人々」で助監督を務め、後に「ファイヤー」「ディックス」「ダーティ・ハリー4」「ゼンチ」「ドビー」作品で共作。ジョエル・ストロバーを補佐して「リーサル・ウェポン」シリーズ、「ダイ・ハード2」「フォード・フェアレーンの冒険」「ラスト・ボイスカウト」を手掛け、「ロードハウス」「孤独の街」「アクション・ジャクソン」では製作総指揮を経験している。

製作／ビル・アンガー

ヴァージニア州生まれ。トリニティー大学卒業後、アクティーズ・スタジオで演劇を学ぶ。ハリー・ユフランドと共に、エージェントの仕事を始めるユフランド・ロス・アンガー・マネージメントは「デニー・ロ・スコセッシ、R・スコット、A・ラパフ、D・バットナム等を抱え、ジェイリアン」「プレーヤ・ブ・ナー」「ウォーゲーム」「キング・オブ・コメディ」等の製作に携わる。トニー・スコットとは、スタッフ・プロダクションを設立した。

音楽／ハンス・ジィマー

ドイツ生まれの英国育ち。トレバー・ホンを等と組みヒット作、ラジオ・スターの創を世に送る、簡潔な時代感覚から、今ハリウッド映画にかかせない個性として多くの傑作を残している。代表作には、「パスコット監督作「ディス・キッド」「サンダーバードスコット監督作「ブラックレイン」「テルマ&ルイーズ」「ミスカリー」映画になった。「レイジー」、その他「ドライビング・ミス・デイジー」「グリーン・カード」「アサシン」。

撮影監督／ジェフリー・ケ・ベスカロ
衣装デザイン／スーザン・ベッカー
プロダクションデザイン／ベンジミン・フェルナンデス
編集／マイケル・トロニック
&クリスチャン・ワーグナー

撮影のI・L・キムボールは「トップガ」「ビバリーヒルズ・コップ2」「リベンジ」参加したスコット組、その他ジェイコズ・ラダー」「カリ・リー・ス」等を手掛けスーザン・ベッカーは「ディス・オブ・サ」「ビバリーヒルズ・コップ」の他、スピ「リベンジ」「ディス・オブ・サンダーバ」き、「T・スコット作品に参加、見ドリー「1492/コロンブスの」「ランボー3」怒りのアフガン」「ハンディ・ジョーンズ」最後の聖戦」を手掛けている。編集は音楽門をMトロニック「ストリート・オファイヤー」コーワ「ラスライン」他のスコット組が、効果音部門ではCリーワーグ「リベンジ」以降の全スコット作品に参が担当。スコット特有の大胆な音使いは回も健在だ。

Cast

BRAD PITT

You guys want to smoke a ball or...?

ブラッド・ピット

無邪気なろくでなし、天使の顔したウル、イケナイ魅力でハートを盗む奴

「なにかイケナイことをするでしょ」思わず、そう聞きたくなってしまうような子供のように悪戯っぽく光った青い目。極上の微笑を浮かべて別にそうでもない、答えをはぐらかしそうな優しい口もとに。「アルマゲドン」(98)、「ファイト・クラブ」(99)、「ジョー・ブラックによろしく」(98)、「ハリー・ポッター」(01)、「ロッカー」(03)、「ヴィヨルド」(04)、「ヴィヨルド」(05)、「ヴィヨルド」(06)、「ヴィヨルド」(07)、「ヴィヨルド」(08)、「ヴィヨルド」(09)、「ヴィヨルド」(10)、「ヴィヨルド」(11)、「ヴィヨルド」(12)、「ヴィヨルド」(13)、「ヴィヨルド」(14)、「ヴィヨルド」(15)、「ヴィヨルド」(16)、「ヴィヨルド」(17)、「ヴィヨルド」(18)、「ヴィヨルド」(19)、「ヴィヨルド」(20)、「ヴィヨルド」(21)、「ヴィヨルド」(22)、「ヴィヨルド」(23)、「ヴィヨルド」(24)、「ヴィヨルド」(25)、「ヴィヨルド」(26)、「ヴィヨルド」(27)、「ヴィヨルド」(28)、「ヴィヨルド」(29)、「ヴィヨルド」(30)、「ヴィヨルド」(31)、「ヴィヨルド」(32)、「ヴィヨルド」(33)、「ヴィヨルド」(34)、「ヴィヨルド」(35)、「ヴィヨルド」(36)、「ヴィヨルド」(37)、「ヴィヨルド」(38)、「ヴィヨルド」(39)、「ヴィヨルド」(40)、「ヴィヨルド」(41)、「ヴィヨルド」(42)、「ヴィヨルド」(43)、「ヴィヨルド」(44)、「ヴィヨルド」(45)、「ヴィヨルド」(46)、「ヴィヨルド」(47)、「ヴィヨルド」(48)、「ヴィヨルド」(49)、「ヴィヨルド」(50)、「ヴィヨルド」(51)、「ヴィヨルド」(52)、「ヴィヨルド」(53)、「ヴィヨルド」(54)、「ヴィヨルド」(55)、「ヴィヨルド」(56)、「ヴィヨルド」(57)、「ヴィヨルド」(58)、「ヴィヨルド」(59)、「ヴィヨルド」(60)、「ヴィヨルド」(61)、「ヴィヨルド」(62)、「ヴィヨルド」(63)、「ヴィヨルド」(64)、「ヴィヨルド」(65)、「ヴィヨルド」(66)、「ヴィヨルド」(67)、「ヴィヨルド」(68)、「ヴィヨルド」(69)、「ヴィヨルド」(70)、「ヴィヨルド」(71)、「ヴィヨルド」(72)、「ヴィヨルド」(73)、「ヴィヨルド」(74)、「ヴィヨルド」(75)、「ヴィヨルド」(76)、「ヴィヨルド」(77)、「ヴィヨルド」(78)、「ヴィヨルド」(79)、「ヴィヨルド」(80)、「ヴィヨルド」(81)、「ヴィヨルド」(82)、「ヴィヨルド」(83)、「ヴィヨルド」(84)、「ヴィヨルド」(85)、「ヴィヨルド」(86)、「ヴィヨルド」(87)、「ヴィヨルド」(88)、「ヴィヨルド」(89)、「ヴィヨルド」(90)、「ヴィヨルド」(91)、「ヴィヨルド」(92)、「ヴィヨルド」(93)、「ヴィヨルド」(94)、「ヴィヨルド」(95)、「ヴィヨルド」(96)、「ヴィヨルド」(97)、「ヴィヨルド」(98)、「ヴィヨルド」(99)、「ヴィヨルド」(100)、「ヴィヨルド」(101)、「ヴィヨルド」(102)、「ヴィヨルド」(103)、「ヴィヨルド」(104)、「ヴィヨルド」(105)、「ヴィヨルド」(106)、「ヴィヨルド」(107)、「ヴィヨルド」(108)、「ヴィヨルド」(109)、「ヴィヨルド」(110)、「ヴィヨルド」(111)、「ヴィヨルド」(112)、「ヴィヨルド」(113)、「ヴィヨルド」(114)、「ヴィヨルド」(115)、「ヴィヨルド」(116)、「ヴィヨルド」(117)、「ヴィヨルド」(118)、「ヴィヨルド」(119)、「ヴィヨルド」(120)、「ヴィヨルド」(121)、「ヴィヨルド」(122)、「ヴィヨルド」(123)、「ヴィヨルド」(124)、「ヴィヨルド」(125)、「ヴィヨルド」(126)、「ヴィヨルド」(127)、「ヴィヨルド」(128)、「ヴィヨルド」(129)、「ヴィヨルド」(130)、「ヴィヨルド」(131)、「ヴィヨルド」(132)、「ヴィヨルド」(133)、「ヴィヨルド」(134)、「ヴィヨルド」(135)、「ヴィヨルド」(136)、「ヴィヨルド」(137)、「ヴィヨルド」(138)、「ヴィヨルド」(139)、「ヴィヨルド」(140)、「ヴィヨルド」(141)、「ヴィヨルド」(142)、「ヴィヨルド」(143)、「ヴィヨルド」(144)、「ヴィヨルド」(145)、「ヴィヨルド」(146)、「ヴィヨルド」(147)、「ヴィヨルド」(148)、「ヴィヨルド」(149)、「ヴィヨルド」(150)、「ヴィヨルド」(151)、「ヴィヨルド」(152)、「ヴィヨルド」(153)、「ヴィヨルド」(154)、「ヴィヨルド」(155)、「ヴィヨルド」(156)、「ヴィヨルド」(157)、「ヴィヨルド」(158)、「ヴィヨルド」(159)、「ヴィヨルド」(160)、「ヴィヨルド」(161)、「ヴィヨルド」(162)、「ヴィヨルド」(163)、「ヴィヨルド」(164)、「ヴィヨルド」(165)、「ヴィヨルド」(166)、「ヴィヨルド」(167)、「ヴィヨルド」(168)、「ヴィヨルド」(169)、「ヴィヨルド」(170)、「ヴィヨルド」(171)、「ヴィヨルド」(172)、「ヴィヨルド」(173)、「ヴィヨルド」(174)、「ヴィヨルド」(175)、「ヴィヨルド」(176)、「ヴィヨルド」(177)、「ヴィヨルド」(178)、「ヴィヨルド」(179)、「ヴィヨルド」(180)、「ヴィヨルド」(181)、「ヴィヨルド」(182)、「ヴィヨルド」(183)、「ヴィヨルド」(184)、「ヴィヨルド」(185)、「ヴィヨルド」(186)、「ヴィヨルド」(187)、「ヴィヨルド」(188)、「ヴィヨルド」(189)、「ヴィヨルド」(190)、「ヴィヨルド」(191)、「ヴィヨルド」(192)、「ヴィヨルド」(193)、「ヴィヨルド」(194)、「ヴィヨルド」(195)、「ヴィヨルド」(196)、「ヴィヨルド」(197)、「ヴィヨルド」(198)、「ヴィヨルド」(199)、「ヴィヨルド」(200)、「ヴィヨルド」(201)、「ヴィヨルド」(202)、「ヴィヨルド」(203)、「ヴィヨルド」(204)、「ヴィヨルド」(205)、「ヴィヨルド」(206)、「ヴィヨルド」(207)、「ヴィヨルド」(208)、「ヴィヨルド」(209)、「ヴィヨルド」(210)、「ヴィヨルド」(211)、「ヴィヨルド」(212)、「ヴィヨルド」(213)、「ヴィヨルド」(214)、「ヴィヨルド」(215)、「ヴィヨルド」(216)、「ヴィヨルド」(217)、「ヴィヨルド」(218)、「ヴィヨルド」(219)、「ヴィヨルド」(220)、「ヴィヨルド」(221)、「ヴィヨルド」(222)、「ヴィヨルド」(223)、「ヴィヨルド」(224)、「ヴィヨルド」(225)、「ヴィヨルド」(226)、「ヴィヨルド」(227)、「ヴィヨルド」(228)、「ヴィヨルド」(229)、「ヴィヨルド」(230)、「ヴィヨルド」(231)、「ヴィヨルド」(232)、「ヴィヨルド」(233)、「ヴィヨルド」(234)、「ヴィヨルド」(235)、「ヴィヨルド」(236)、「ヴィヨルド」(237)、「ヴィヨルド」(238)、「ヴィヨルド」(239)、「ヴィヨルド」(240)、「ヴィヨルド」(241)、「ヴィヨルド」(242)、「ヴィヨルド」(243)、「ヴィヨルド」(244)、「ヴィヨルド」(245)、「ヴィヨルド」(246)、「ヴィヨルド」(247)、「ヴィヨルド」(248)、「ヴィヨルド」(249)、「ヴィヨルド」(250)、「ヴィヨルド」(251)、「ヴィヨルド」(252)、「ヴィヨルド」(253)、「ヴィヨルド」(254)、「ヴィヨルド」(255)、「ヴィヨルド」(256)、「ヴィヨルド」(257)、「ヴィヨルド」(258)、「ヴィヨルド」(259)、「ヴィヨルド」(260)、「ヴィヨルド」(261)、「ヴィヨルド」(262)、「ヴィヨルド」(263)、「ヴィヨルド」(264)、「ヴィヨルド」(265)、「ヴィヨルド」(266)、「ヴィヨルド」(267)、「ヴィヨルド」(268)、「ヴィヨルド」(269)、「ヴィヨルド」(270)、「ヴィヨルド」(271)、「ヴィヨルド」(272)、「ヴィヨルド」(273)、「ヴィヨルド」(274)、「ヴィヨルド」(275)、「ヴィヨルド」(276)、「ヴィヨルド」(277)、「ヴィヨルド」(278)、「ヴィヨルド」(279)、「ヴィヨルド」(280)、「ヴィヨルド」(281)、「ヴィヨルド」(282)、「ヴィヨルド」(283)、「ヴィヨルド」(284)、「ヴィヨルド」(285)、「ヴィヨルド」(286)、「ヴィヨルド」(287)、「ヴィヨルド」(288)、「ヴィヨルド」(289)、「ヴィヨルド」(290)、「ヴィヨルド」(291)、「ヴィヨルド」(292)、「ヴィヨルド」(293)、「ヴィヨルド」(294)、「ヴィヨルド」(295)、「ヴィヨルド」(296)、「ヴィヨルド」(297)、「ヴィヨルド」(298)、「ヴィヨルド」(299)、「ヴィヨルド」(300)、「ヴィヨルド」(301)、「ヴィヨルド」(302)、「ヴィヨルド」(303)、「ヴィヨルド」(304)、「ヴィヨルド」(305)、「ヴィヨルド」(306)、「ヴィヨルド」(307)、「ヴィヨルド」(308)、「ヴィヨルド」(309)、「ヴィヨルド」(310)、「ヴィヨルド」(311)、「ヴィヨルド」(312)、「ヴィヨルド」(313)、「ヴィヨルド」(314)、「ヴィヨルド」(315)、「ヴィヨルド」(316)、「ヴィヨルド」(317)、「ヴィヨルド」(318)、「ヴィヨルド」(319)、「ヴィヨルド」(320)、「ヴィヨルド」(321)、「ヴィヨルド」(322)、「ヴィヨルド」(323)、「ヴィヨルド」(324)、「ヴィヨルド」(325)、「ヴィヨルド」(326)、「ヴィヨルド」(327)、「ヴィヨルド」(328)、「ヴィヨルド」(329)、「ヴィヨルド」(330)、「ヴィヨルド」(331)、「ヴィヨルド」(332)、「ヴィヨルド」(333)、「ヴィヨルド」(334)、「ヴィヨルド」(335)、「ヴィヨルド」(336)、「ヴィヨルド」(337)、「ヴィヨルド」(338)、「ヴィヨルド」(339)、「ヴィヨルド」(340)、「ヴィヨルド」(341)、「ヴィヨルド」(342)、「ヴィヨルド」(343)、「ヴィヨルド」(344)、「ヴィヨルド」(345)、「ヴィヨルド」(346)、「ヴィヨルド」(347)、「ヴィヨルド」(348)、「ヴィヨルド」(349)、「ヴィヨルド」(350)、「ヴィヨルド」(351)、「ヴィヨルド」(352)、「ヴィヨルド」(353)、「ヴィヨルド」(354)、「ヴィヨルド」(355)、「ヴィヨルド」(356)、「ヴィヨルド」(357)、「ヴィヨルド」(358)、「ヴィヨルド」(359)、「ヴィヨルド」(360)、「ヴィヨルド」(361)、「ヴィヨルド」(362)、「ヴィヨルド」(363)、「ヴィヨルド」(364)、「ヴィヨルド」(365)、「ヴィヨルド」(366)、「ヴィヨルド」(367)、「ヴィヨルド」(368)、「ヴィヨルド」(369)、「ヴィヨルド」(370)、「ヴィヨルド」(371)、「ヴィヨルド」(372)、「ヴィヨルド」(373)、「ヴィヨルド」(374)、「ヴィヨルド」(375)、「ヴィヨルド」(376)、「ヴィヨルド」(377)、「ヴィヨルド」(378)、「ヴィヨルド」(379)、「ヴィヨルド」(380)、「ヴィヨルド」(381)、「ヴィヨルド」(382)、「ヴィヨルド」(383)、「ヴィヨルド」(384)、「ヴィヨルド」(385)、「ヴィヨルド」(386)、「ヴィヨルド」(387)、「ヴィヨルド」(388)、「ヴィヨルド」(389)、「ヴィヨルド」(390)、「ヴィヨルド」(391)、「ヴィヨルド」(392)、「ヴィヨルド」(393)、「ヴィヨルド」(394)、「ヴィヨルド」(395)、「ヴィヨルド」(396)、「ヴィヨルド」(397)、「ヴィヨルド」(398)、「ヴィヨルド」(399)、「ヴィヨルド」(400)、「ヴィヨルド」(401)、「ヴィヨルド」(402)、「ヴィヨルド」(403)、「ヴィヨルド」(404)、「ヴィヨルド」(405)、「ヴィヨルド」(406)、「ヴィヨルド」(407)、「ヴィヨルド」(408)、「ヴィヨルド」(409)、「ヴィヨルド」(410)、「ヴィヨルド」(411)、「ヴィヨルド」(412)、「ヴィヨルド」(413)、「ヴィヨルド」(414)、「ヴィヨルド」(415)、「ヴィヨルド」(416)、「ヴィヨルド」(417)、「ヴィヨルド」(418)、「ヴィヨルド」(419)、「ヴィヨルド」(420)、「ヴィヨルド」(421)、「ヴィヨルド」(422)、「ヴィヨルド」(423)、「ヴィヨルド」(424)、「ヴィヨルド」(425)、「ヴィヨルド」(426)、「ヴィヨルド」(427)、「ヴィヨルド」(428)、「ヴィヨルド」(429)、「ヴィヨルド」(430)、「ヴィヨルド」(431)、「ヴィヨルド」(432)、「ヴィヨルド」(433)、「ヴィヨルド」(434)、「ヴィヨルド」(435)、「ヴィヨルド」(436)、「ヴィヨルド」(437)、「ヴィヨルド」(438)、「ヴィヨルド」(439)、「ヴィヨルド」(440)、「ヴィヨルド」(441)、「ヴィヨルド」(442)、「ヴィヨルド」(443)、「ヴィヨルド」(444)、「ヴィヨルド」(445)、「ヴィヨルド」(446)、「ヴィヨルド」(447)、「ヴィヨルド」(448)、「ヴィヨルド」(449)、「ヴィヨルド」(450)、「ヴィヨルド」(451)、「ヴィヨルド」(452)、「ヴィヨルド」(453)、「ヴィヨルド」(454)、「ヴィヨルド」(455)、「ヴィヨルド」(456)、「ヴィヨルド」(457)、「ヴィヨルド」(458)、「ヴィヨルド」(459)、「ヴィヨルド」(460)、「ヴィヨルド」(461)、「ヴィヨルド」(462)、「ヴィヨルド」(463)、「ヴィヨルド」(464)、「ヴィヨルド」(465)、「ヴィヨルド」(466)、「ヴィヨルド」(467)、「ヴィヨルド」(468)、「ヴィヨルド」(469)、「ヴィヨルド」(470)、「ヴィヨルド」(471)、「ヴィヨルド」(472)、「ヴィヨルド」(473)、「ヴィヨルド」(474)、「ヴィヨルド」(475)、「ヴィヨルド」(476)、「ヴィヨルド」(477)、「ヴィヨルド」(478)、「ヴィヨルド」(479)、「ヴィヨルド」(480)、「ヴィヨルド」(481)、「ヴィヨルド」(482)、「ヴィヨルド」(483)、「ヴィヨルド」(484)、「ヴィヨルド」(485)、「ヴィヨルド」(486)、「ヴィヨルド」(487)、「ヴィヨルド」(488)、「ヴィヨルド」(489)、「ヴィヨルド」(490)、「ヴィヨルド」(491)、「ヴィヨルド」(492)、「ヴィヨルド」(493)、「ヴィヨルド」(494)、「ヴィヨルド」(495)、「ヴィヨルド」(496)、「ヴィヨルド」(497)、「ヴィヨルド」(498)、「ヴィヨルド」(499)、「ヴィヨルド」(500)、「ヴィヨルド」(501)、「ヴィヨルド」(502)、「ヴィヨルド」(503)、「ヴィヨルド」(504)、「ヴィヨルド」(505)、「ヴィヨルド」(506)、「ヴィヨルド」(507)、「ヴィヨルド」(508)、「ヴィヨルド」(509)、「ヴィヨルド」(510)、「ヴィヨルド」(511)、「ヴィヨルド」(512)、「ヴィヨルド」(513)、「ヴィヨルド」(514)、「ヴィヨルド」(515)、「ヴィヨルド」(516)、「ヴィヨルド」(517)、「ヴィヨルド」(518)、「ヴィヨルド」(519)、「ヴィヨルド」(520)、「ヴィヨルド」(521)、「ヴィヨルド」(522)、「ヴィヨルド」(523)、「ヴィヨルド」(524)、「ヴィヨルド」(525)、「ヴィヨルド」(526)、「ヴィヨルド」(527)、「ヴィヨルド」(528)、「ヴィヨルド」(529)、「ヴィヨルド」(530)、「ヴィヨルド」(531)、「ヴィヨルド」(532)、「ヴィヨルド」(533)、「ヴィヨルド」(534)、「ヴィヨルド」(535)、「ヴィヨルド」(536)、「ヴィヨルド」(537)、「ヴィヨルド」(538)、「ヴィヨルド」(539)、「ヴィヨルド」(540)、「ヴィヨルド」(541)、「ヴィヨルド」(542)、「ヴィヨルド」(543)、「ヴィヨルド」(544)、「ヴィヨルド」(545)、「ヴィヨルド」(546)、「ヴィヨルド」(547)、「ヴィヨルド」(548)、「ヴィヨルド」(549)、「ヴィヨルド」(550)、「ヴィヨルド」(551)、「ヴィヨルド」(552)、「ヴィヨルド」(553)、「ヴィヨルド」(554)、「ヴィヨルド」(555)、「ヴィヨルド」(556)、「ヴィヨルド」(557)、「ヴィヨルド」(558)、「ヴィヨルド」(559)、「ヴィヨルド」(560)、「ヴィヨルド」(561)、「ヴィヨルド」(562)、「ヴィヨルド」(563)、「ヴィヨルド」(564)、「ヴィヨルド」(565)、「ヴィヨルド」(566)、「ヴィヨルド」(567)、「ヴィヨルド」(568)、「ヴィヨルド」(569)、「ヴィヨルド」(570)、「ヴィヨルド」(571)、「ヴィヨルド」(572)、「ヴィヨルド」(573)、「ヴィヨルド」(574)、「ヴィヨルド」(575)、「ヴィヨルド」(576)、「ヴィヨルド」(577)、「ヴィヨルド」(578)、「ヴィヨルド」(579)、「ヴィヨルド」(580)、「ヴィヨルド」(581)、「ヴィヨルド」(582)、「ヴィヨルド」(583)、「ヴィヨルド」(584)、「ヴィヨルド」(585)、「ヴィヨルド」(586)、「ヴィヨルド」(587)、「ヴィヨルド」(588)、「ヴィヨルド」(589)、「ヴィヨルド」(590)、「ヴィヨルド」(591)、「ヴィヨルド」(592)、「ヴィヨルド」(593)、「ヴィヨルド」(594)、「ヴィヨルド」(595)、「ヴィヨルド」(596)、「ヴィヨルド」(597)、「ヴィヨルド」(598)、「ヴィヨルド」(599)、「ヴィヨルド」(600)、「ヴィヨルド」(601)、「ヴィヨルド」(602)、「ヴィヨルド」(603)、「ヴィヨルド」(604)、「ヴィヨルド」(605)、「ヴィヨルド」(606)、「ヴィヨルド」(607)、「ヴィヨルド」(608)、「ヴィヨルド」(609)、「ヴィヨルド」(610)、「ヴィヨルド」(611)、「ヴィヨルド」(612)、「ヴィヨルド」(613)、「ヴィヨルド」(614)、「ヴィヨルド」(615)、「ヴィヨルド」(616)、「ヴィヨルド」(617)、「ヴィヨルド」(618)、「ヴィヨルド」(619)、「ヴィヨルド」(620)、「ヴィヨルド」(621)、「ヴィヨルド」(622)、「ヴィヨルド」(623)、「ヴィヨルド」(624)、「ヴィヨルド」(625)、「ヴィヨルド」(626)、「ヴィヨルド」(627)、「ヴィヨルド」(628)、「ヴィヨルド」(629)、「ヴィヨルド」(630)、「ヴィヨルド」(631)、「ヴィヨルド」(632)、「ヴィヨルド」(633)、「ヴィヨルド」(634)、「ヴィヨルド」(635)、「ヴィヨルド」(636)、「ヴィヨルド」(637)、「ヴィヨルド」(638)、「ヴィヨルド」(639)、「ヴィヨルド」(640)、「ヴィヨルド」(641)、「ヴィヨルド」(642)、「ヴィヨルド」(643)、「ヴィヨルド」(644)、「ヴィヨルド」(645)、「ヴィヨルド」(646)、「ヴィヨルド」(647)、「ヴィヨルド」(648)、「ヴィヨルド」(649)、「ヴィヨルド」(650)、「ヴィヨルド」(651)、「ヴィヨルド」(652)、「ヴィヨルド」(653)、「ヴィヨルド」(654)、「ヴィヨルド」(655)、「ヴィヨルド」(656)、「ヴィヨルド」(657)、「ヴィヨルド」(658)、「ヴィヨルド」(659)、「ヴィヨルド」(660)、「ヴィヨルド」(661)、「ヴィヨルド」(662)、「ヴィヨルド」(663)、「ヴィヨルド」(664)、「ヴィヨルド」(665)、「ヴィヨルド」(666)、「ヴィヨルド」(667)、「ヴィヨルド」(668)、「ヴィヨルド」(669)、「ヴィヨルド」(670)、「ヴィヨルド」(671)、「ヴィヨルド」(672)、「ヴィヨルド」(673)、「ヴィヨルド」(674)、「ヴィヨルド」(675)、「ヴィヨルド」(676)、「ヴィヨルド」(677)、「ヴィヨルド」(678)、「ヴィヨルド」(679)、「ヴィヨルド」(680)、「ヴィヨルド」(681)、「ヴィヨルド」(682)、「ヴィヨルド」(683)、「ヴィヨルド」(684)、「ヴィヨルド」(685)、「ヴィヨルド」(686)、「ヴィヨルド」(687)、「ヴィヨルド」(688)、「ヴィヨルド」(689)、「ヴィヨルド」(690)、「ヴィヨルド」(691)、「ヴィヨルド」(692)、「ヴィヨルド」(693)、「ヴィヨルド」(694)、「ヴィヨルド」(695)、「ヴィヨルド」(696)、「ヴィヨルド」(697)、「ヴィヨルド」(698)、「ヴィヨルド」(699)、「ヴィヨルド」(700)、「ヴィヨルド」(701)、「ヴィヨルド」(702)、「ヴィヨルド」(703)、「ヴィヨルド」(704)、「ヴィヨルド」(705)、「ヴィヨルド」(706)、「ヴィヨルド」(707)、「ヴィヨルド」(708)、「ヴィヨルド」(709)、「ヴィヨルド」(710)、「ヴィヨルド」(711)、「ヴィヨルド」(712)、「ヴィヨルド」(713)、「ヴィヨルド」(714)、「ヴィヨルド」(715)、「ヴィヨルド」(716)、「ヴィヨルド」(717)、「ヴィヨルド」(718)、「ヴィヨルド」(719)、「ヴィヨルド」(720)、「ヴィヨルド」(721)、「ヴィヨルド」(722)、「ヴィヨルド」(723)、「ヴィヨルド」(724)、「ヴィヨルド」(725)、「ヴィヨルド」(726)、「ヴィヨルド」(727)、「ヴィヨルド」(728)、「ヴィヨルド」(729)、「ヴィヨルド」(730)、「ヴィヨルド」(731)、「ヴィヨルド」(732)、「ヴィヨルド」(733)、「ヴィヨルド」(734)、「ヴィヨルド」(735)、「ヴィヨルド」(736)、「ヴィヨルド」(737)、「ヴィヨルド」(738)、「ヴィヨルド」(739)、「ヴィヨルド」(740)、「ヴィヨルド」(741)、「ヴィヨルド」(742)、「ヴィヨルド」(743)、「ヴィヨルド」(744)、「ヴィヨルド」(745)、「ヴィヨルド」(746)、「ヴィヨルド」(747)、「ヴィヨルド」(748)、「ヴィヨルド」(749)、「ヴィヨルド」(750)、「ヴィヨルド」(751)、「ヴィヨルド」(752)、「ヴィヨルド」(753)、「ヴィヨルド」(754)、「ヴィヨルド」(755)、「ヴィヨルド」(756)、「ヴィヨルド」(757)、「ヴィヨルド」(758)、「ヴィヨルド」(759)、「ヴィヨルド」(760)、「ヴィヨルド」(761)、「ヴィヨルド」(762)、「ヴィヨルド」(763)、「ヴィヨルド」(764)、「ヴィヨルド」(765)、「ヴィヨルド」(766)、「ヴィヨルド」(767)、「ヴィヨルド」(768)、「ヴィヨルド」(769)、「ヴィヨルド」(770)、「ヴィヨルド」(771)、「ヴィヨルド」(772)、「ヴィヨルド」(773)、「ヴィヨルド」(774)、「ヴィヨルド」(775)、「ヴィヨルド」(776)、「ヴィヨルド」(777)、「ヴィヨルド」(778)、「ヴィヨルド」(779)、「ヴィヨルド」(780)、「ヴィヨルド」(781)、「ヴィヨルド」(782)、「ヴィヨルド」(783)、「ヴィヨルド」(784)、「ヴィヨルド」(785)、「ヴィヨルド」(786)、「ヴィヨルド」(787)、「ヴィヨルド」(788)、「ヴィヨルド」(789)、「ヴィヨルド」(790)、「ヴィヨルド」(791)、「ヴィヨルド」(792)、「ヴィヨルド」(793)、「ヴィヨルド」(794)、「ヴィヨルド」(795)、「ヴィヨルド」(796)、「ヴィヨルド」(797)、「ヴィヨルド」(798)、「ヴィヨルド」(799)、「ヴィヨルド」(800)、「ヴィヨルド」(801)、「ヴィヨルド」(802)、「ヴィヨルド」(803)、「ヴィヨルド」(804)、「ヴィヨルド」(805)、「ヴィヨルド」(806)、「ヴィヨルド」(807)、「ヴィヨルド」(808)、「ヴィヨルド」(809)、「ヴィヨルド」(810)、「ヴィヨルド」(811)、「ヴィヨルド」(812)、「ヴィヨルド」(813)、「ヴィヨルド」(814)、「ヴィヨルド」(815)、「ヴィヨルド」(816)、「ヴィヨルド」(817)、「ヴィヨルド」(818)、「ヴィヨルド」(819)、「ヴィヨルド」(820)、「ヴィヨルド」(821)、「ヴィヨルド」(822)、「ヴィヨルド」(823)、「ヴィヨルド」(824)、「ヴィヨルド」(825)、「ヴィヨルド」(826)、「ヴィヨルド」(827)、「ヴィヨルド」(828)、「ヴィヨルド」(829)、「ヴィヨルド」(830)、「ヴィヨルド」(831)、「ヴィヨルド」(832)、「ヴィヨルド」(833)、「ヴィヨルド」(834)、「ヴィヨルド」(835)、「ヴィヨルド」(836)、「ヴィヨルド」(837)、「ヴィヨルド」(838)、「ヴィヨルド」(839)、「ヴィヨルド」(840)、「ヴィヨルド」(841)、「ヴィヨルド」(842)、「ヴィヨルド」(843)、「ヴィヨルド」(844)、「ヴィヨルド」(845)、「ヴィヨルド」(846)、「ヴィヨルド」(847)、「ヴィヨルド」(848)、「ヴィヨルド」(849)、「ヴィヨルド」(850)、「ヴィヨルド」(851)、「ヴィヨルド」(852)、「ヴィヨルド」(853)、「ヴィヨルド」(854)、「ヴィヨルド」(855)、「ヴィヨルド」(856)、「ヴィヨルド」(857)、「ヴィヨルド」(858)、「ヴィヨルド」(859)、「ヴィヨルド」(860)、「ヴィヨルド」(861)、「ヴィヨルド」(862)、「ヴィヨルド」(863)、「ヴィヨルド」(864)、「ヴィヨルド」(865)、「ヴィヨルド」(866)、「ヴィヨルド」(867)、「ヴィヨルド」(868)、「ヴィヨルド」(869)、「ヴィヨルド」(870)、「ヴィヨルド」(871)、「ヴィヨルド」(872)、「ヴィヨルド」(873)、「ヴィヨルド」(874)、「ヴィヨルド」(875)、「ヴィヨルド」(876)、「ヴィヨルド」(877)、「ヴィヨルド」(878)、「ヴィヨルド」(879)、「ヴィヨルド」(880)、「ヴィヨルド」(881)、「ヴィヨルド」(882)、「ヴィヨルド」(883)、「ヴィヨルド」(884)、「ヴィヨルド」(885)、「ヴィヨルド」(886)、「ヴィヨルド」(887)、「ヴィヨルド」(888)、「ヴィヨルド」(889)、「ヴィヨルド」(890)、「ヴィヨルド」(891)、「ヴィヨルド」(892)、「ヴィヨルド」(893)、「ヴィヨルド」(894)、「ヴィヨルド」(895)、「ヴィヨルド」(896)、「ヴィヨルド」(897)、「ヴィヨルド」(898)、「ヴィヨルド」(899)、「ヴィヨルド」(900)、「ヴィヨルド」(901)、「ヴィヨルド」(902)、「ヴィヨルド」(903)、「ヴィヨルド」(904)、「ヴィヨルド」(905)、「ヴィヨルド」(906)、「ヴィヨルド」(907)、「ヴィヨルド」(908)、「ヴィヨルド」(909)、「ヴィヨルド」(910)、「ヴィヨルド」(911)、「ヴィヨルド」(912)、「ヴィヨルド」(913)、「ヴィヨルド」(914)、「ヴィヨルド」(915)、「ヴィヨルド」(916)、「ヴィヨルド」(917)、「ヴィヨルド」(918)、「ヴィヨルド」(919)、「ヴィヨルド」(920)、「ヴィヨルド」(921)、「ヴィヨルド」(922)、「ヴィヨルド」(923)、「ヴィヨルド」(924)、「ヴィヨルド」(925)、「ヴィヨルド」(926)、「ヴィヨルド」(927)、「ヴィヨルド」(928)、「ヴィヨルド」(929)、「ヴィヨルド」(930)、「ヴィヨルド」(931)、「ヴィヨルド」(932)、「ヴィヨルド」(933)、「ヴィヨルド」(934)、「ヴィヨルド」(935)、「ヴィヨルド」(936)、「ヴィヨルド」(937)、「ヴィヨルド」(938)、「ヴィヨルド」(939)、「ヴィヨルド」(940)、「ヴィヨルド」(941)、「ヴィヨルド」(942)、「ヴィヨルド」(943)、「ヴィヨルド」(944)、「ヴィヨルド」(945)、「ヴィヨルド」(946)、「ヴィヨルド」(947)、「ヴィヨルド」(948)、「ヴィヨルド」(949)、「ヴィヨルド」(950)、「ヴィヨルド」(951)、「ヴィヨルド」(952)、「ヴィヨルド」(953)、「ヴィヨルド」(954)、「ヴィヨルド」(955)、「ヴィヨルド」(956)、「ヴィヨルド」(957)、「ヴィヨルド」(958)、「ヴィヨルド」(959)、「ヴィヨルド」(960)、「ヴィヨルド」(961)、「ヴィヨルド」(962)、「ヴィヨルド」(963)、「ヴィヨルド」(964)、「ヴィヨルド」(965)、「ヴィヨルド」(966)、「ヴィヨルド」(967)、「ヴィヨルド」(968)、「ヴィヨルド」(969)、「ヴィヨルド」(970)、「ヴィヨルド」(971)、「ヴィヨルド」(972)、「ヴィヨルド」(973)、「ヴィヨルド」(974)、「ヴィヨルド」(975)、「ヴィヨルド」(976)、「ヴィヨルド」(977)、「ヴィヨルド」(978)、「ヴィヨルド」(979)、「ヴィヨルド」(980)、「ヴィヨルド」(981)、「ヴィヨルド」(982)、「ヴィヨルド」(983)、「ヴィヨルド」(984)、「ヴィヨルド」(985)、「ヴィヨルド」(986)、「ヴィヨルド」(987)、「ヴィヨルド」(988)、「ヴィヨルド」(989)、「ヴィヨルド」(990)、「ヴィヨルド」(991)、「ヴィヨルド」(992)、「ヴィヨルド」(993)、「ヴィヨルド」(994)、「ヴィヨルド」(995)、「ヴィヨルド」(996)、「ヴィヨルド」(997)、「ヴィヨルド」(998)、「ヴィヨルド」(999)、「ヴィヨルド」(1000)、「ヴィヨルド」(1001)、「ヴィヨルド」(1002)、「ヴィヨルド」(1003)、「ヴィヨルド」(1004)、「ヴィヨルド」(1005)、「ヴィヨルド」(1006)、「ヴィヨルド」(1007)、「ヴィヨルド」(1008)、「ヴィヨルド」(1009)、「ヴィヨルド」(1010)、「ヴィヨルド」(1011)、「ヴィヨルド」(1012)、「ヴィヨルド」(1013)、「ヴィヨルド」(1014)、「ヴィヨルド」(1015)、「ヴィヨルド」(1016)、「ヴィヨルド」(1017)、「ヴィヨルド」(1018)、「ヴィヨルド」(1019)、「ヴィヨルド」(1020)、「ヴィヨルド」(1021)、「ヴィヨルド」(1022)、「ヴィヨルド」(1023)、「ヴィヨルド」(1024)、「ヴィヨルド」(1025)、「ヴィヨルド」(1026)、「ヴィヨルド」(1027)、「ヴィヨルド」(1028)、「ヴィヨルド」(1029)、「ヴィヨルド」(1030)、「ヴィヨルド」(1031)、「ヴィヨルド」(1032)、「ヴィヨルド」(1033)、「ヴィヨルド」(1034)、「ヴィヨルド」(1035)、「ヴィヨルド」(1036)、「ヴィヨルド」(1037)、「ヴィヨルド」(1038)、「ヴィヨルド」(1039)、「ヴィヨルド」(1040)、「ヴィヨルド」(1041)、「ヴィヨルド」(1042)、「ヴィヨルド」(1043)、「ヴィヨルド」(1044)、「ヴィヨルド」(1045)、「ヴィヨルド」(1046)、「ヴィヨルド」(1047)、「ヴィヨルド」(1048)、「ヴィヨルド」(1049)、「ヴィヨルド」(1050)、「ヴィヨルド」(1051)、「ヴィヨルド」(1052)、「ヴィヨルド」(1053)、「ヴィヨルド」(1054)、「ヴィヨルド」(1055)、「ヴィヨルド」(1056)、「ヴィヨルド」(1057)、「ヴィヨルド」(1058)、「ヴィヨルド」(1059)、「ヴィヨルド」(1060)、「ヴィヨルド」(1061)、「ヴィヨルド」(1062)、「ヴィヨルド」(1063)、「ヴィヨルド」(1064)、「ヴィヨルド」(1065)、「ヴィヨルド」(1066)、「ヴィヨルド」(1067)、「ヴィヨルド」(1068)、「ヴィヨルド」(1069)、「ヴィヨルド」(1070)、「ヴィヨルド」(1071)、「ヴィヨルド」(1072)、「ヴィヨルド」(1073)、「ヴィヨルド」(1074)、「ヴィヨルド」(1075)、「ヴィヨルド」(1076)、「ヴィヨルド」(1077)、「ヴィヨルド」(1078)、「ヴィヨルド」(1079)、「ヴィヨルド」(1080)、「ヴィヨルド」(1081)、「ヴィヨルド」(1082)、「ヴィヨルド」(1083)、「ヴィヨルド」(1084)、「ヴィヨルド」(1085)、「ヴィヨルド」(1086)、「ヴィヨルド」(1087)、「ヴィヨルド」(1088)、「ヴィヨルド」(1089)、「ヴィヨルド」(1090)、「ヴィヨルド」(1091)、「ヴィヨルド」(1092)、「ヴィヨルド」(1093)、「ヴィヨルド」(1094)、「ヴィヨルド」(1095)、「ヴィヨルド」(1096)、「ヴィヨルド」(1097)、「ヴィヨルド」(1098)、「ヴィヨルド」(1099)、「ヴィヨルド」(1100)、「ヴィヨルド」(1101)、「ヴィヨルド」(1102)、「ヴィヨルド」(1103)、「ヴィヨルド」(1104)、「ヴィヨルド」(1105)、「ヴィヨルド」(1106)、「ヴィヨルド」(1107)、「ヴィヨルド」(1108)、「ヴィヨルド」(1109)、「ヴィヨルド」(1110)、「ヴィヨルド」(1111)、「ヴィヨルド」(1112)、「ヴィヨルド」(1113)、「ヴィヨルド」(1114)、「ヴィヨルド」(1115)、「ヴィヨルド」(1116)、「

Synopsis〈物語〉

デトロイトのコミックブックショップで働く若者、クラレンス・ウォリー（ウリス チャン・スレッター）の頭の中はエルビス・プレスリーとカンフー映画に占領されている。誕生日の夜だもの、大好きな映画を見に行こうと誘ったものの、てっきりOKしてくれるかと思っていたガールフレンドのアニー（ヴィヴィアン・ウー）に断られてしまったクラレンスは、ひとりで映画を見に行くことになったものの、結局、ひとりで行くのもつまらないと、ガールフレンドのアニーを誘ってみたものの、やっぱりOKしてくれない。

場末の映画館でソニー千葉の3本立てをコキマゲて見入っているとハッとなるスタイルのブロンドのキュートな女のオッパイ、話しかけてきた映画が終われば、彼女に誘われるままスパイを食べに行き、自分の部屋に案内し、趣味についてオシャベリし、メイクアップをし、夢をよりどりーな夜を過ごした。

アップ？というのが彼女の名前。実はあなたの店の客スペシャル誕生日のプレゼントにって、頼まれたの。それで、あの映画館へ行ったってわけよ。日曜、コールガールだけど、まだ4日目で、客は4人目と言った。ゆうべのセックスも最悪だった。けど、話の合うことも最悪。すっかりのぼせちゃってんのクラレンスってこんな男？それもコールガールの身でありながら思わせようだけ。でもあんたが好きでクラパマ。「嘘ってたんだって言わないところが、嘘じゃないわ」というわけで、数時間後にはクラレンスはモニュメントのようなモーテルのベッドに行ってみる。

ラッド・ピットがひとりでいる時、ココッティの手下のスペイン男がやってきたクラパマの消息をつかまえにモーテルのオーナーに問われるままに、クラレンスとアラパマの名を大声に告げた。アラパマがひとり先にモーテルに戻ると、大男が待っていてじわじわとアラパマをいじめ、プッシュがベッドの下から見つかると、彼女を殺そうとしたアラパマは、あらゆる手段で男に打ち勝った。そこへ戻ってきたクラレンスとともに大急ぎでモーテルを逃げ出した。

エリオットがスピード違反で捕まり、白い紙を持っていたことから、ダイス刑事（クリストファー・ペン）たちが追跡したところ、エリオットは木曜日にシェルとドノヴィッツが取引しようとしていることを吐いた。

刑事は、無線放送を個にエリオットのズボンの下に送話装置を付けさせることにした。

同時に水曜日新聞社のアーバンサタイ・ニュースのレポーターにやってきたクレンスとアラビッツが、エリオットと落ちる約束をした。その会話は近くの部屋を訪れ、交渉を約束した。

その頃、テートロットからやってきた組織の男たちに、またしてもフロイドがクレンスの行き先を喋ったために、男たちはホテルへ向かった。

「やだ！」と、警官隊がドノヴィッツの部屋へ踏み込むまえ、そこへ新たな組織の男たちも乗り込む……。

ディックのルームメイトのフロイドは、テニスホーバーのところへ行ったり、妻のアラパマを紹介されると、ニューヨーク出身のクリフォードは世話の役に立ったりとかいろいろ。クリフォードの話によると、サンゼルス業界間のイザコザが殺しに発展したとみなしているようだった。

いずれにしてもこのままテートロットにいては、まずいクラレンスはアラパマは紫のキャデラックを拾ってロサンゼルスへと向かった。

クリフォードのもとにヴィンセンツォ・ココッティ（クリストファー・ウーケン）と名乗る黒服の男が手下を連れて現れ、クラレンスとアラパマの行方をたずねようとしたが、ココッティは、殺し屋初めてなんだ。1989年以来なと言って、容赦なくクリフォードに弾丸をぶっぱなした。その後で、クラレンスが父に残していたメモ――そこには、ロサンゼルスの友人、ディック・リチャードソン（ホー・ヒ）の住所が書いてあった。――を手に入れた。

ディックの家を訪れたクラレンスは、50万ドルもするという金のプールを見た。ルームメイトの紹介をもらったディックは後の祭り。ヤクのたれ込みをされる「フロイド」ことフランシス・ウォリーが、ディックのもとへ、ドノヴィッツ、エリオット、ドノヴィッツ（ルル・キルマーンとヴィンセンツォ・ココッティ）の3人を連れてやってきた。

エリオットとドノヴィッツは、ディックの友人でエリオットの通じてドノヴィッツに話をつけようとしていたことから、小心なエリオットを脅かし、結果、クラレンスは大阪日にドノヴィッツとスタッフとりつけた。

聞けば、アラパマにはドレクセル・スパイビー（ヘイリー・オールドマン）という ヒモがいる。クラレンスは（守護神エルビスの魂（パル・キルマーンとヴィンセンツォ）ができるのだが、このエルビスが言うことがきくのだが、同じ安全を喝ってぬくと生きていて許せるか？」クラレンスは金のために奉仕を忘れずドレクセルのねぐらへと向かった。

ドレクセルは、ポン引きの他にヤクの売人もやっていて、自分もヤク中、取引の相手をショットガンで吹き飛ばしちまえ。凶暴で狂犬のような野郎だ。クラレンスが話をつけようにもいっこうに埒があかない。それどころかクラレンスは知きめされ、このままでは生きて戻れそうもないどっさにクラレンスの38口径が火を噴き、ドレクセルと3人の部下をオシャカにしてしまった。そこにいた女に命じて、スーツケースに詰め帰った。

「殺したんだって、ロマンティックだわ！」と感動しているアラパマの目前でスーツケースを開くと、なんとそれは彼女の服ではなくて、白い紙の詰まった袋がギッシリ。翌朝、クラレンスはクラパマを連れて3名以上を会っていない父親クリフォードになっていた。

TRUE romance

1994—どう猛な愛だけが生き残る。

[トゥルー・ロマンス～オリジナル・サウンドトラック]

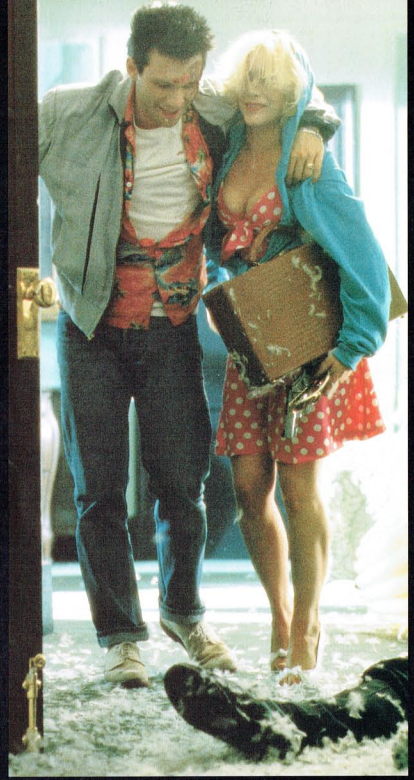
1994—どう猛な愛だけが生き残る。全米大ヒット・アクション・ラヴ・ストーリー、クリスチャン・スレーター主演の話題作"トゥルー・ロマンズ"のサウンドトラックはポリドールより発売。《参加アーティスト：チャーリー・セクスト、クリス・アイザック、ロバート・バーマー他》

クラレンス・ウォリー：クリスチャン・スレーター
アラバマ：パトリシア・アークエット
クリフォード・ウォリー：デニス・ホッパー
殺害者エルビス：バル・キルマー
ドレイク氏・スパイビー：ガリー・オールドマン
ブロード：ブラッド・ピット
ヴィンセンゾ・ココッティ：クリストファー・ウォーケン
ディック・リッチー：マイケル・ラパポート
ボット・ブリッジファー：ブロンソン・ピンショット
リー・ドゥウィッド：ハウル・ルビネック
ビッグ・ドン・ワッツ：サミュエル・L・ジャクソン
ニック・タイムス：クリス・ペン
コーディ：ニコルズ：トム・サイズモア

監督：トニー・スコット
脚本：クエンティン・タランティーノ
制作：サミュエル・ハディダ
　　スティーブ・ペリー
　　ビル・アンガー
撮影監督：ジェフリー・L・キムボール
音楽：ハンス・ズィマー
編集：マイケル・トロニック
　　クリスチャン・ワーグナー
製作総指揮：ジェームズ・G・ロビンソン
　　ゲーリー・バーバー
　　ボブ&ハーベイ・ワインスティン
　　スタンリー・マルゴリス
プロダクションデザイン：ベンジャミン・フェルナンデス
衣装デザイン：スーザン・ベッカー
特殊効果スーパーバイザー：アル・ディ・サッロ
メイクアップ・アーティスト：フランシス・カリリーサ
制作：ディヴィス・フィルム・プロダクション
製作協力：モーガン・クリーク・プロダクション

Clarence Worley : CHRISTIAN SLATER
Alabama Whitman : PATRICIA ARQUETTE
Clifford Worley : DENNIS HOPPER
Ie Mimpz : VAL KILMER
Drexl Spivey : GARY OLDMAN
Floyd : BRAD PITT
Vincenzo Coccotti : CHRISTOPHER WALKEN
Dick Richie : MICHAEL RAPAPORT
Elliott Blitzer : BRONSON PINCHOT
Lee Donowitz : SAUL RUBINEK
Big Don Watts : SAMUEL L. JACKSON
Nicky Dimes : CHRISTOPHER PENN
Cody Nichols : TOM SIZEMORE

Director : TONY SCOTT
Screenwriter : QUENTIN TARANTINO
Producer : SAMUEL HADIDA
　　STEVE PERRY
　　BILL UNGER
Director of Photography : JEFFREY KIMBALL
Music : HANS ZIMMER
Editor : MICHAEL TRONICK
　　CHRISTIAN WAGNER
Executive Producer : JAMES G. ROBINSON
　　GARY BARBER
　　BOB & HARVEY WEINSTEIN
　　STANLEY MARGOLIS
Production Design : BENJAMIN FERNANDEZ
Costume Design : SUSAN BECKER
Special Effects Supervisor : AL DI SARRO
Make Up Artist : FRANCIS X. CARRISOSA
DAVIS FILMS PRODUCTION
MORGAN CREEK PRODUCTION

[FOOTAGE]
「血笑！殺人鬼」1974年 東映　「男たちの挽歌」1987年コーテル・プリンセス　「フリージャック」1992年モーガン・クリーク　「カウチポテト・アドベンチャー」1992年モーガン・クリーク

[MUSIC LIST]
In Dreams by JOHN WAITE/ Graceland by CHARLIE SEXTON/ White Wedding by BILLY IDOL/Heartbreak Hotel by VAL KILMER/ I Want Your Body by NYMPHOMANIA/ I Need a H eart to Come Home by by SHELBY LYNNE/Viens Mettez Sous le Dome Extais from Lakme from the motion picture "THE HUNGER"/The Other Side by AEROSMITH/Love Is The Tender Trap by ROBERT